
精霊の瞳

神威 遙樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊の瞳

【Nコード】

N1500X

【作者名】

神威 遙樹

【あらすじ】

人が思っているよりもこの世界は謎めいて、この世界は神秘的。ゆっくり廻るこの世界には決して表舞台に出ることの無い事がある。それは考えられ無い程不思議な世界の裏舞台。昼の空の星の様に、海底の小さな石の様に、普通に生きていては決して見えないけれども存在する、この世界の裏の顔。

ひよんな事からその裏舞台に来てしまった北藤悠輝、陽の目に映らない裏舞台で何を視る？

貴方の周りを見て下さい、自分が思っているよりも、魔術は近く

にあるのです。

NO. 0 : Prologue

東から顔を出した太陽が煉瓦造りの建物を照らし、その間を朝霧が漂う。

ここは霧の都、ロンドン。世界に名高い大都市である。

そんな京の郊外に真つ黒い柵で囲われた広大な森がある。

政府が推進したグリーンベルトの一つであり、同時に文明が発達する以前からここにあったそれは自然保護区にも指定されている。

自然保護区ゆえに一般人は立ち入り禁止で、広大な面積を持つこの森の周りを全て高い柵で囲む厳重さ。

あまりに厳重なので近隣に住む人々は軍が秘密の実験を行っているだの、強大な魔女が住んでいるだの好き勝手に噂をする。

しかしまあ、木々が生い茂り緑を通り越して黒々とした外観を見ればそんな噂が立つても仕方ないと言えは仕方ない。

高名な『黒ノ森』シュバルツバルトにも勝るとも劣らないの程黒々としているのだから。

そんな怪しげな森を囲む柵にも一ヶ所だけ門がある。

しかしこれがまた人気の殆ど無い、地元の人でも中々通らない謂わば裏道に面した場所にあり地味。

またその裏道には街灯なんて気の利いた物が無いので夜は真つ暗になり、真つ黒な柵の門は見事に消失してしまふ。

門存在を知る者と現英国の女王を知らない英国人を探したら後者の方が早く見つかるだろう。

要は門の存在を知る者などほぼゼロである。

ただ一部の者達を除けばの話であるが。

朝霧漂う時間、森を囲む柵に唯一ある門の前に一人の少年が立っている。

リュックサックを背負い、左手にはキャリーバックの持ち手を掴ん

だ少年。

柵と同様に真っ黒な髪に細身の体、顔はまだ幼い。

西洋人特有の顔立ちでもなく、そもそも肌の色は白ではない。見た目の特徴だけで判断すれば東洋人、しかも極東地域だろう。

そんな少年は右手に持った紙切れと目の前にある怪しげな門を静かに交互にジツと見つめるばかり。

朝っぱらからこんな場所で怪しい事この上無いが、こんな場所であるから周りには誰もいない。

少しして、少年は一步門の方へと踏み出した。

すると門が音を立てずにゆっくりと開いた。

朝霧が開いた門の周辺だけ晴れ、奥へと続く道が現れる。

少年はそれを見ると少し戸惑いながらも、それでも無く中へと入って霧の中へ消えた。

門はゆっくりと、やはり音一つ立てずに閉まり、再び朝霧が漂う。まるで今入っていった少年を隠すように。

森はただ静かに、厳かにそこに佇んでいるだけであった。

NO. 1: begins to walk

俺、北藤悠輝きたふじゆうきは絵に描いた様な平凡な人生を送ってきたわけじゃないけれど、それでも漫画とかドラマとか映画とか、なんかそんなフィクションの登場人物の様なぶっ飛んだ人生を送ってきたわけでもない。

どんなに話を盛っても『少し変わった』人生だ。

それも『芸能人波瀾万丈人生！』みたいな笑いあり涙ありでもない地味なもの。まあ地味な時点で波瀾万丈とかあり得ないけども。

詳しく言えば、二つほど『少し変わった』ものがあっただけ。

まずは家が寺。それも結構古いらしく、知らないうちに『日本の古寺院百選』みたいなのに選ばれてた寺。法隆寺とか東大寺とかそんな有名なもんでも国宝があるような凄いもんでもないけど、由緒は正しいらしい。

それでももう一つは、変にテンションの高いじいちゃんがいること。例えば、小学校に入る少し前からいきなり「英語をやるべきだ」とか言って、抵抗を知らない無垢な俺に英語の勉強という習慣を作らせた。

英検だのTOEICだの、なんか資格になるのも受けた。周りは大人数ばかりで、まだまだ小さかった俺はなんかその雰囲気の本気で怖くて泣きそうだったのを今でも覚えてる。

更にじいちゃんは英語を俺に叩き込み出した時期と同じぐらいのときから、武道という武道を俺に英語同様いきなり叩き込み始めた。これは英語と違い、自称師範級のじいちゃんから直で教わったものだ。

特に俺には柔道がマッチしたらしく、気が付けば柔道に一本化され、更には時々山籠り修行とか時代錯誤な事とかもしたりしたし、「熊に勝て」とか無茶苦茶な事を言われたりもした。

まあ実際は熊と戦ったなんて事は無いし、山籠りだって洞窟で『も

ののけ姫』状態になったわけでもない。

柔道を筆頭とした武道をじいちゃんから教わっただけ。

それにこの二つはやってる時は訳分からずにやってたけど、後で生きた。

中学に入って始まった英語の授業は死ぬほど簡単だったし、同じく入った部活の柔道部では全国までいって活躍出来た。

それに最近じゃ親が子供に小さい頃から英才教育をするのが流行りらしい。

俺はその先駆けかなんかかなあ、なんて最近は思い始めた。

……『英才教育』なんて凄いいもんでもなかったから、プロとかU18みたいな最高レベルの世界と俺は無縁だったけどね。

噂の『なんたら王子』なんかはもっと努力してる。

だから『少し変わった』人生。

別にホームレスになって段ボールを食べた事も無いし、それ以前に親が離婚とかもしていない。

『少し変わってるけど恵まれた』人生、そうとも言える。

……つい最近までは。

全ての始まりは中学生最後の夏休みの中盤、ちょうど八月の真ん中が過ぎて、そろそろやってない宿題とか高校受験とかが頭にチラつき始めた頃。

リビングでテレビを見ていたらじいちゃんがやってきて、俺に何かが詰まった大きい封筒を渡して一言。

「悠輝や、これからロンドンに一人で行け」とかなんとか。

そんな事いきなり言われたら、なんの冗談だと思っるのは当たり前の前
等。

俺だって勿論何言ってるのって返した。

でもこれが冗談でも何でもなかったらしく、なんかよく分からない言葉を並べられ、混乱してるうちに飛行機のチケットとか荷物の準備とか、準備という準備を全てされた。俺のパスポートをいつ作ったのかは謎だ。

我が両親に助けを求めてはみたんだけど、「頑張つて！」とエールだけ。
何を頑張るのか分からないし、そもそも息子がいきなりロンドンへ旅立たされそうなのに親が止めないとは何事か。
生まれて初めて親を本気で恨んだ瞬間だね。

「……あり得ないでしょ、この状況……」

現在俺がこんな状況になるまでの経緯を思い出していると、自然と溜め息が漏れる。

今、目の前には真っ黒い柵と大きな門。周りはひたすら霧。
昨日の夜に訳も分からずヒースロー空港に降り立って、ヒースローエクスプレス特急列車でロンドンの市街地に。

リュックに入ってた信じられないくらいアバウトな地図とやたら細かい指示の書かれた紙を見て、取り敢えず何故か予約されてたビジネスホテルにチェックイン。
紙の指示通り朝早くにチェックアウトして電車乗ったりバス乗ったりして着いたのがここ。

何度も紙に書かれた指示とアバウトな地図を見て確認もした、ここで間違いない。

……なんか凄い生い茂ってる森の前なんだけど。

「今さらだけど、なんでこの紙の指示にちゃんと従ってるんだろ……」

確かにロンドンに行くあては無いよ、全く無い。

でも指示に従う義理も無い。

だってやたらと詳しい指示を紙に書いてるくせに、最後の文だけムカつくぐらい抽象的。明らかに言葉を濁してる。

だからこんな紙を無視して、日本大使館に行っても良かった筈だよ、俺。

今さら気付いた、遅いけど。

でもまあ幸いまだ朝だし、財布に詰まったお金はまだ結構ある。なんせ初めて財布の中を見た時はちよつと引いたぐらいあったから。だから今からでも間に合う、日本大使館に行こう。

場所とか知らないけど、なんとかなる気がする。

少なくともこんな人気ゼロの門に辿り着く事よりは簡単そうだ。

そう決めて一歩前に踏み出した瞬間、門が音一つ立てずに静かに開いた。

……はい？

「……どうしよう……」

遠目からしか見てなかったけど、この門は鍵が掛かっていた筈だ。それともずつと周りに漂ってる霧のせいで見間違えてただけだったのか？

いやそれよりも、こんなにでっかい門が音一つ立てずに自動で開くものなの？

機械っぽいもの見当たらないけど。

でもこの門、明らかに俺を通す為に開いた。

仮に中から誰か出てくるなら、もうとっくにその人と俺は対面してる。

決まった時間になると門が開くとか、そんな無用心なシステムを採用してるとも思えない。ていうか絶対採用しない。

開いたのは俺を通す為。

……入るしかない、よねえ。

なんか勝手に溜め息が一つ出た。

目的地が日本大使館から森の奥へ変わったけども、仕方ないので歩き出す。

もしかしたらじいちゃん知り合いが半端無い金持ちで、この奥に巨大な城を建てて住んでるかもしれないし。

……落下した人工衛星が俺に当たるよりも低確率だと思っけど。

森の中へ入ると意外にも、整備はされていないけども、それでも平らで広い道が一本森の奥へと続いていた。

柵の外から見たらあれほど茂ってた木もこの道の側には無い。コンクリートじゃないだけで、ここは道路なのかもしれない。

それになんか新しい感じの人の通った形跡もあるし、取り敢えず一安心。

入って直ぐに振り返ったらもう既に門が閉まっていたのには焦ったけど、この人が通った形跡があるから冷静でいられる。

だってこの森には俺以外にも人がいるって証があるし。

仮に何かあったら通じるか分からないけど、事情とじいちゃんから貰ったこのアバウトな地図と指示の書かれた最後にイラツとくる紙を見せよう。まさかいきなり殺されたりはしないよ、たぶん。

「……まだ？」

腕時計を見ると森に入ってから三十分は経った。

でもまだひたすら道。

ウォークマンとかそういう携帯音楽プレーヤーなんかを持ってきて

ないから、はつきり言っただけ。

最初は物珍しい『ヨーロッパの森!』って感じで周りを見て暇じゃないかったけど、よく見てみれば日本の森とあんまり変わらない。いや、樹木の種類は違つかもしれない。でも俺そんなに詳しくないし。

なんか鳥とかいればまた違つんだらうけど。

流石に飽きてきた。

でもなんかただ前を見つめて歩くのも、ひたすら続く道を見るだけでしんどい。だから結局はキョロキョロと周りを見渡してるんだけど……

「……………ん？」

キョロキョロと森の中を見回していると、森の少し奥で何かがキラキラ光りながら飛んでいる。

ホタル………な筈は無い。

ホタルはもつとなんと言うか、落ち着いた感じの淡い光だ。あんなキラキラしてない。

俺の知る限り、あんな感じに光るのはテレビに出てくるゴージャスな宝石だ。

でもまさか宝石が飛ぶ筈無い。

道から少し外れるけど、ちょっとだけ森に入っただけそのキラキラな何かに近付いてみる。

20メートルぐらいまで近寄って、その光ってる何かの形が見えてきた。

………まだ距離があるからちゃんとした大きさは分からないけど、………たぶん掌サイズの女の子。

金の長い髪をたぶん二つにくくって黄緑色の綺麗なワンピースっぽい服を着て、トンボみたいに半透明で綺麗な羽を四枚背中に付けた、掌サイズのキラキラ光ってる女の子。

……目を擦って、もう一回見る。
いない。

「……見間違い、だよな？」

森から道に戻って一息つく。

うん、見間違いだ。

きつとヨーロッパの森には妖精が住んでいるっていう日本人の典型的なイメージが作った幻だ。

じいちゃんに訳も分からずにここに送られたから、疲れて見えただけだ。

いくら映画のCGよりもずっとリアルに見えたからといって、それが本物とは限らない。

ティンクみたいだったか思ったけど、そういえばピーターパンの最初の舞台はロンドンだ。

きつとそんな俺の記憶が作ったただけだ。

……なんだか怖くなってきた。

少し早足になって森の奥へ進む。人の通った跡があるんだ、取り敢えず誰かに会いたい。

早足で更に十分は経ったと思う。

あの門からどれくらい歩いたのかは分からないけど、森が開けた。目の前には周りよりも少し高い丘。

木々の無い、開けたその丘の上には……巨大なお城。

まさにお姫様とかが住んでそうな、巨大な城。

尖塔がいくつも並び立ったそのの見た目は、千葉の浦安にあるあの城よりもどちらかと言えばあの魔法学校に近い。

「……ホントに……？」

その城の圧倒的な迫力に気圧されて、喉からポツリと出た声は掠

れていた。

NO.1: begins to walk (後書き)

初めましての方は初めまして、そうでない方はこんにちは、神威です。

リメイク版、これよりスタートです。

勿論の事ながらリメイク前を知らなくても全く問題ありませんのでご安心ください。

前を知っている方も、色々挟まったりしますのでお願いします。

さて、今回は敢えて短いです。

……言うことそれだけなんですけど、
なんかすいません。

取り敢えず、優しい目で読んで頂ければ幸いです。
ではこれからよろしくお願いいたします。

NO.2: Encounter

目の前の巨大なお城に圧倒されながらも、何故か体が吸い寄せられる様に前へと進む。

近付いてみるとその大きさがよく分かる。

日本のお城とは全然違う作りになってるし、そもそもこんなに大きくはない。

……実際に日本の有名なお城には行った事は無いけれど、ドラマとか映画とかで見るやつよりは遥かに大きい。

つていうか大きすぎる気がする。逆に不便そうだ。

ボツと前に進んで、丘を登っていたら人混みが見えてきた。

まだよく分からないけど結構いる。

ここで何かイベントでも行われるのかな？

「よかった、人いるじゃん」

仮に何かのイベントがあるのなら、あのじいちゃんが俺を送り込むのもまだ理解出来る。

いや、理解は出来るけど納得はしない。

だいたい日本からの参加者って浮くし。

今は違うけど、昔のサスケでアメリカ人は浮いてたし、俺もそんな感じになるのは嫌だよ。

……サスケみたいな競技が行われるんなら俺は逃げるけども。全力で。

あれに出るのは一概に化物だから。オールスターズとかあれ、リアルターミネーターじゃんか。

そんな事考えながら人混みに近付いていくと、よかったサスケっぽいのはしないらしい。

皆当たり前だけど外国人で、年格好は同じくらいだ。

人混みの奥の方にはでっかい門が見えるから、多分皆お城の前で何かを待つてるんだと思う。

……ところでやっぱりなんで俺はこんな所に送り込まれたんだろう？
布教かな？ 何も知らないけど大乘仏教。

「……ん？」

気付けば周りの外国人さん達は皆チラチラと俺を見ている。
興味深げに見る人もいれば訝しげに見る人もいる。
ともかくなんか注目されてるね。

……スツゴい気まずい。

なんか「なんでいるの？」みたいな雰囲気出す人もいるし。
そんなに東洋人が珍しいのかな？

日本人とか韓国人のサッカー選手とかいるじゃんヨーロッパにも。

『ヒデ』とか知ってるでしょ？

見られるのはいいい気がしない。

人種の差か、年格好は同じくらいでもガタイが違う人も結構いる。
顔もなんか如何にもヨーロッパみたいだなばかりだし、そんなの
に見られたら緊張するしちよつと怖い。

強そうだもんね。

……取り敢えず平常心でいる事を心掛ける。

やっと着いたー、とか言いたげな雰囲気出して。

実際はここで何をするのかとか全然知らないけど。

「ハアイ！ 君、東洋人？ 珍しいね。日本？ 韓国？ 中国？
ジャパニーズ
俺は日本人だと思うんだけど、アタリかな？」

「……はい？」

不意に真後ろから声を掛けられる。

まさか遠巻きで見ただけじゃなくて話し掛けてくるのかとビックリ

したけど、別になんか高圧的なものでもない普通の挨拶だった。振り向いて挨拶をくれた人を見てみれば、やっぱり年格好が同じくらしいの男の子だ。

羨ましくも背が高く、顔の掘りがしつかりある如何にもヨーロッパ人みたいな顔した結構イケメンな人。

茶髪が所々跳ねてるけど、多分ワックスだろうね。

スツゴい気さくな笑顔を向けてくれてる。

なんとなく、仲良くなれそう。

「ああうん、日本人だよ。なんで分かったの？」

じいちゃんに叩き込まれた英語がここで役に立つ。

語学はまず喋れて聞けたらそれでいい。書くのは二の次だ。

そんな事はともかく、自分で言うのもあれだけど日本人にしてはまだマシな英語で返す。

っていうかなんで日本人って分かったのか？

はっきり言って同じ東洋人でもあんまり区別はつかないのに、なんで見るとヨーロッパ人の彼が分かったのか不思議で仕方ない。

どう考えても世界で一番中国人が多いのに。

「ワアオ、英語上手いな！ 少なくともオーストラリア訛りより俺はずっと君の発音の方が好きだ。でも、君が日本人なら、ええーつと……。あー、あー、……ちゃんと俺は日本語で喋るよ」

「……………」

英語が上手いとか言われてちょっと嬉しい。

この人絶対良い人だね。

とか思ってたらいきなり日本語で喋りだした。

しかもカタコトじゃない、かなり流暢だ。

俺の英語を外国人が聞くよりも、この人の日本語を日本人が聞いた

らこつちの方がよりネイティブに近い。
微妙に発音がズレたりもしてるけど、立派なものだよ。ボビーよりはいい。

「日本語上手いね」

「ホントに!? ヤツタね、日本人に日本語話すの初めてだったから通じるか緊張したよ。ああそうだ、なんで分かったかだけど、君がドーガン《童顔》だからだよ。極東の人は西洋おれらから見たら若く見えるんだけど、日本人は特にそう見えるから。まあ流石はイリヨ―《医療》 大国、アンチ・エイジングってやつだろ？」

俺と一緒に言葉が上手いって言われたら嬉しいらしい。
ガッツポーズしてくれた。

……でも日本語を初めて使った相手が俺って事は、今まで日本人に会わなかった事だよな。

なんで日本語学ぼうと思ったの？
いつか旅行する為？

そんな彼が教えてくれた理由は確かになんか聞いた事がある話だ。なんか分からないけど東アジアの人は幼く見られがち。どの辺が幼いのか分からないけど、ともかくそう見られがちなのは話で聞いた事がある。

だから二十歳越えても『ボーイ』って言われる人は言われる。

そんなもって彼も俺に向かって童顔とか悪気も無く、っていうかむしろ褒めたつもりで言ってくれるけど、俺にはその言葉、刺さるんだよね。

同じ日本人からも童顔と言われる俺。

向こうから見たらどれくらい幼いのか怖くて訊けない。

同じ年と思われてるかな？

あと、いくら日本が医療に優れた国だとしても、誰もがそんな事してはいない。

スゲーと感心した感じで俺を見てるけど、何もしてないよ俺。
毎日の洗顔ぐらいだつて。

「しっかし……日本人がここに来るのは珍しいな。まあ別に全然いいけど。ところで君は何学ぶの？ ケルト？ ルーン？ 錬金術？」
「……はい！？ いや、えっと……」

顎を持って珍しいとかボソツと呟く彼。

珍しいとかそんな事言うのはやめて欲しい。

不安になるじゃん。

でもなんか一人で割り切った。

というかなんか別に気にする事でもないらしい。

という事で話題を変えて、なんか一気に顔を近付けて訊いてきた。
近い近い近い。

しかも全然知らない単語ばっかだし。

『錬金術』だけは分かるけど、錬金術ってマンガのイメージしかない。あれね、鋼の。

なんかますます頭がこんがらがってたよ。

上手く返事が出来ない。

「おっと、そう言えば名前まだだったな。俺はアレン、アレン・グレンジャー。西欧じゃ結構、名が通ってたんだぜ？」

自分の胸を親指で指して気さくに自己紹介してくれた。
なんかちよつと有名人らしい。

背も高いし中々なイケメンだし、何気に着てる服とかお洒落だしモデルかな？

それともアレンって名前は如何にもな名前だから覚えやすいし、気さくだから俳優とか？

だったら嬉しいな。

……ってそんな事無いか。

だったら『錬金術』とか言わないよね。

ともかくアレンは自己紹介してくれたから、俺も返さなきゃ失礼だ。

「えっと、俺は北藤悠輝。さっきも言ったけど日本人だよ」

まあ今も日本語で会話してるから丸分かりなんだけどね。

でも自己紹介が名前だけじゃ寂しいし、一個付け加えてみた。

よろしくって言って対外人用のマナー、握手をしようとして右手を出したけど、なんかアレンは顎に指を当てて俺の名前を必死に復唱中。発音練習かな？

俺の名前ベタだし言いやすいと思うんだけどなあ。

右手を出したまま固まった俺にアレンは気が付いて、悪い悪いと右手を出してくれた。

ガッチリ握手したら、なんか安心になってきた。

何するか知らないけど、少なくとも一人普通に喋れる相手が出来た。

「それでユウキ、お前はなんの魔術師？俺はケルトな、ケルト魔術！」

「……『魔術』？」

……アレンの言っている事が理解出来ない。

『魔術』っていうのはアレだ、マンガとかゲームとか小説とかでよく出てくる超常現象的なやつだ。

箒で空飛んだり、杖から炎とかなんか色々出したり、ホイミとかね。ともかくそんな感じのフィクションだ。

昔は確かに『魔術師』なる存在はいたそうだけど、あれはまだ科学技術が発達する前の非科学的な物。

科学技術の発展によって無くなった筈だし。

今じゃホントにオカルトな分野だよな。

「そう、魔術。それでユウキはわざわざ日本からイングランドまで来て、何学ぶつもりなんだ？」

「……」

アレンは真面目に俺に訊いてる。

別にふざけてるわけでも無い。

夢見がちな人でもなさそうだし、勿論嘘をついてはいないと思う。じゃなきゃこんなに真っ直ぐ俺の目見れないよ。

……という事は。

なんか胸のドキドキが止まらなくなってきたよ。

「……ごめんちょっと待って」

「？」

一旦落ち着こう。まずは自分の状況を再確認だ。

なんかいきなり俺はじいちゃんにここロンドンへ送り込まれて、なんか入ってた地図辿ったらこの森の前に着いて、中入って進んだら今日の前にあるお城があつて、アレンに会った。

ここまではオツケー。

いや一般的に考えれば明らかにおかしいけど、でももうそんな事気にしてたら終わらない。

それで次にアレンの言葉を整理しよう。

何を学びに来たのかアレンは俺に訊いたって事は、学校的な何かかな？

『魔術』とか言ってるから、『魔術』をやるのかな？

……二つ足したら『魔術の学校』だね。

「……ごめんアレン、ここどこ？」

「何言ってるんだ？ 『学院』に決まってるんだろ？」

「…………『学院』？」
「『学院』。魔術を教える施設だ。何今さら当たり前の事訊いてんだ？」

よつしゃあ、推理が大当たり……って喜べるかあっ!？
なんだ『学院』って!？

なんだ『魔術』を教える学校って!？
ファンタジーか!？

ヤバイよ、本格的に胸のドキドキが止まらないよ。

俺、絶対迷い込んだんじゃない場所に迷い込んだじゃったよ。

あの変態は俺に何させようとしてんのさ!？

英語、武道ときて次は魔術っておい!

三段目でのオチなのこれは!？

目の前でアレンは首傾げて当たり前じゃんとか言ってるけど、当たり前じゃないから!

何者、あなたは何者ですか!？

「ちよつ、ホントに!？ いやいや魔術ってなに!？」

「…………はあ、何言ってるんだユウキ？ ジョークにしては出来が悪いぜ？」

スッゴい呆れた表情でアレンはそう言ってくれるけども、残念ながらジョークでもなんでも無い。

真正正銘ホントの事だ。

騒いでるから周りの人もなんか訝しげに俺を見てるけど、気にする事じゃない。

どうせ日本語分かんないでしょ!？

取り敢えずアレンの両肩を掴んで、顔を真っ直ぐ見る。

俺の身に起こった事を話そう。

まだ出会ったばかりだけどアレンはきつといい奴だ。信じて話そ

う。

今の俺、あたふたしてるからちゃんと通じるか分からないけど。

「……どうした？」

「じ、実は」

アレン向かって一気に話す。テンポ早いから外国人のアレンにちゃんと伝わってるかは分からない。

分からないけど、話す。

今の俺は本当に藁にもすがる思いだ。

出来ればこの『学院』っていう特殊な場に迷い込んでしまったこの哀れな俺へ具体的なアドバイスが欲しい。

一気に話し終わるとアレンは開いた口が塞がらないって感じ。

という事は一応話は通じたって事だね。そこは一つ安心した。

でも問題はここからだ。

この後どうするかだね。

言っとくけど俺、魔術は使えないよ。

「……な、なんて言えばいいのか分からねえが、ユウキのじいちゃんこそー的だな」

「うん……まあね。……で、俺はこの後どうすべきかな？」

個性的なのは認めよう、認めるよ。認めなきゃおかしいしね、あのキャラで。

でも今はそんな事どうでもいい。

俺はこの後どうすべきか。

これが問題。

アレンも真面目に考えてくれてるらしく、頭に手をやってうーんと唸ってる。

……本当にいい奴だ。
友達どころか親友になれそうだね。

「……そうだな、取り敢えずユウキ、なんか紙とか封筒とか貰わなかったか？ あ、地図とかじゃねえからな？」
「ちよつと待つて」

そういえばなんか封筒を貰った。
中身がなんかやたらと詰まってパンパンになってたやつ。中身は着いてから見るとか言われたし、そのままバックに突っ込んだままだ。キヤリーバックを開けて中を探ってみる。
内側のポケットから直ぐに出てきた。
相変わらずパンパンで、しかもこれが意外と重い。
中に何入れてんだ。
バックを閉じて封筒をアレンに渡す。
アレンはちよつとその分厚さに驚いたけど、それでも受け取って中身を見る。
そして、中から一枚の紙を引き抜いた。

「ほら、これ見る」
「……『入校許可証』、つて？」

引き抜かれた一枚の紙。
真っ白なB4の紙のど真ん中に英語のブロック体で『入校許可証』と手書きで書かれている。
その下にも英語で何か書かれてるけど、崩れに崩れた筆記体で読めない。
紙の左端の下には真っ赤な印が押されていて、英語が読めない人は卒業証書とかと間違えそうだ。

……手書きだから間違えないかな？

「森の前に門があつたろ？ あの門はこれがねえと開かねえんだよ」
「……へえー、機械じゃなかったんだ」
「つてか何も知らなかったのに、開いたから入ったのか？」 『Nature reserve《自然保護区》』つて書いてたのに」
「……ホントに？ 霧で気付かなかつたよ」

あの門は何かのハイテク機械で開いたわけではなかったらしい。確かにあんなでかいのに音一つ立てずに開いたりして怪しかったけど、まさかそんな仕組みだったとは。アレンが呆れ半分驚き半分と言った感じの顔でそんな事言うけど、霧のせいで見えなかつたんだから仕方ない。まあ仮に見てたら日本大使館に直行してただろうから……俺にとつて運の尽きだったつて事かな。出来ればアレンとは別の場所出会いたかつたね。

「まあそんなユウキの度胸のでかさはともかく、本題は次だ。この『入校許可証』はな、当たり前だけど魔術師の家しか絶対に手に入らない。という事はだ、ユウキん家は魔術師のカケーつて事になる」
「……さっきの俺の話聞いてた？ うちはお寺だけどそんな事はしてないつて、絶対！ してたら俺、絶対気付いてるし！」
「テラは魔術と関わり深いつてか、ミツキョーとかは魔術だぜ？ それにユウキが気付かない様に活動なんて、余裕だろ？ ユウキずつとガッコー行つてたりしてたんだからな」

魔術の学校なんだから魔術師の家しか手に入らないつていうのは理になつてるし分かる。

一般人の家にいきなりそんなもん送り付けたらただの怪しい新興宗教か何かだと思われるだからからね。

でも、だからと言って俺の家がそんなだとは言えない。

確かにお寺だ。しかもそこそこ由緒正しい。

アレンの言う『ミツキヨー』なるものはよく分からないけど、うちはそんなんじゃない。

……でも、アレンの最後の言葉は成程確かに返せない。

俺は中学では朝練、学校、部活で夜まで家に帰ってこなかったし、小学校ではずっと外とか友達の家で遊んでいた。家にいない時間は確かに結構ある。

……でも、ずっと家にいた時だって勿論ある。

夏休みに何日間か家でグータラしてた時だつてある。

うちがそんな家系だつて決定打にはならないよ。

「それにほら、これ、お札だろ？」

「……………ホントだ……………」

アレンが封筒をひっくり返す。

蛇が這った様なふにやふにやな文字が書かれたお札が束で出てきた。輪ゴムで縛ってるとか物つ淒い適当な扱いだけど。

……これでやった事も無い『魔術』をやれと？

無理だ、ぶつつけ本番過ぎる。

意図が読めないよ。

……でも、この『学院』つていう施設に俺を送り込み、しかもちやつかりお札なんかを荷物に入れてる辺り、本当に俺をここに入れる気なのかな。

無茶苦茶言い過ぎだね、訴えたらきつと勝てるよ。

「こんな感じの札を使うのはシントーかオンミョードーだと思うぜ、日本の魔術は実際見た事無ねえけど、噂から考えたら」

「じゃあ陰陽道かな、神道は神社だし。」

「本当に何も覚えはねえのか？」

「うん……………身に覚えは無いよ」

アレンが記憶を辿りながら自分の推測を一部発音が怪しいけども言ってくれる。

アレンの言葉を信じて、そこから判断するなら俺は陰陽道かな。

……っていう事は、陰陽師。誰か映画でやってたね。

アレンは本当に俺が何も知らずにここへ来たのかまだ疑ってるらしい。

まあ俺が逆の状態なら俺も疑うだろうから仕方ないね。怪し過ぎる。でも本当に身に覚えが無い。

それに『魔術』ってそんなに簡単に扱えるもんじゃないと思う。

まさかFFみたいに買うわけじゃないだろうし。

だったら仮に習ってるとしたら、絶対に記憶に残ってる筈だ。そもそも忘れたら意味無いし。

だから記憶が無い、イコール何も知らないって事なんだけど、アレンに上手く説明出来ないなあ。

「……今気付いたけどさ、『魔術』について何も知らないから『学院』で教わるんじゃないの？」

よくよく考えてみればそうだ。学校に行く理由は勉強を習う為。

小学生が方程式解けるなら小学校の算数という授業に出る意味は無いだろうし、同じ様に魔術について色々知ってたり使えたりするんなら『学院』になんて行かなくてもいい筈だ。

だったら俺がお札持たされてここに送り込まれる意図は分かるよ、一応。

魔術教わってこいつて事だから。

納得はしないけどな。

俺の言葉を聞いてアレンは頭に手をやりながら一つ息を吐いた。そしてなんか妙に納得した感じの表情で俺を見る。

「……ユウキの家はともかく、ユウキが全く魔術について知らない
つてのは分かったよ、理解出来た」
「やっど?」

今の俺の発言のどこで判断したのかは分からないけど、漸くアレ
ンは分かってくれたらしい。

やれやれって感じの表情がちょっとアレだけど、理解してくれたか
ら良しとしとくよ。

アレンは許可証やお札を封筒に入れ直して俺に返し、両手が空い
たところで懐から何か木の棒を取り出し、それで地面に円とかいっ
ぱい書きながら『学院』の説明をし始める。

「『学院』つてのは確かに教育施設なんだがな、ここに入学する奴
は基本的に自分の扱う魔術系統の基礎基本は出来るんだ。なんでか
つて言うと、まず魔術師つてのは単独で行動しない。必ず同じ魔術
系統の人らが集まって『魔術組織』を作る。だからその『組織』で
独自に子供は教育を受けるんだ。勿論俺も受けたし、周りにいる奴
も全員受けてる」

「……だつたら意味無いじゃん『学院』」

地面に小さな丸をいっぱい書いて、更にそれを大きな丸で囲む。

その囲んだ大きな丸の下に『PARTY《組織》』と書かれる。

そしてまた、今度は大きい丸をいっぱい書き始めた。

たぶん、その一つ一つが『PARTY』だと思う。

最後にそれらを線で取り敢えず繋ぎ、アレンは顔を上げて俺を見た。

「確かにただ魔術が使える様になるだけなら、『学院』に来なくて
いい。けどなあ、組織は強くならなきゃいけないんだ。それに組
織間の関係とかも要る。それらの役割を引き受けてるのが『学院』
だ」

「？」

丸と丸を繋いだ線をトントンと棒で叩きながらアレンは言う。
線は『PARTY』同士の繋がりって事だろうね。

なんとなくだけどアレンの言ってる意味は分かる。
要はオトナな関係だ。

国とか会社とかに置き換えたら分かりやすい。
強さは国力、繋がりは同盟。
いざこつちがヤバくなったらちよつと頼みますってやつだ。

……意外と魔術師の世界も親近感があるもの持つてるね。
でもそこで『学院』がその役割を引き受けている意味がピンと来
ない。

教育機関でしょ？

「『学院』の教授達は世界でも上位の魔術師だ。そんな人達から学
べる事はいっぱいあるし、他にも教養とか色々身に付く。一つの組
織でずっと教育するよりも芸が広がる可能性が高いつて事だ。これ
が直結して組織の力になる」

「繋がりは？」

「『学院』にはヨーロッパとかアメリカ、アフリカの一部の地域か
ら色々な組織の奴が来る。一緒に学習してるうちにそいつらが仲良
くなれば、組織同士も一度は接触出来る。ちよつど今の俺とユウキ
みたいに全然違う系統の組織ともな」

組織は構成している若いメンバーの力を上げつつ、他の組織との
繋がりを得れるチャンスがあるって事かな。

……なんというか、オトナだ。
オトナな場だよ『学院』。

普通の学校とは毛色が違う場所だ。
政界パーティーみたいな側面持つてるよ、イメージだけど。実際は

どんなもんか知らないよ。

「……なんか、ただ学びに来る場所じゃないんだね」

「まあ、そんな難しく考えなくてもいいぜ？ 気楽に友達作って自分の腕磨いてたら後は大人が勝手に動くからな」

小難しいオトナの思惑とかがありそうだけど、アレンは笑いながら否定する。

まあ確かに教育機関だし、実際は大人達が動くんだろうけど、それでも変に使命に燃えてる人とかいると思うんだよね。

なんとなく周りを見て探してみる。

もう俺をチラチラ見てる人はいない。

元々の知り合いなのか新しく作った友達なのかは知らないけど、殆どの人が誰かと喋ってる。

……実は何かの駆け引きが、なんて事も無さそうだね。かなりリラックスした感じの表情だし。

「アジアの人が全然いないね」

見渡す限り欧米系の顔ばかり。

黒人と白人はいても黄色人種が全然いない。

不自然なくらいいない。

そういうえばアレンが最初に日本人は珍しいとか言ってたっけ？

やっぱり場所が場所だから？

ロンドンだもんね、遠いよ。

「最初に言っただろ？ 東洋人は珍しいんだ。何せインドも中国も日本も独特の魔術を持つてるけど、殆ど全部が秘密主義。今でこそ西洋（せいしやう）と触れる機会は増えたけどな、それでも中々出てこねえし。そんなんだから世界で唯一の教育機関たる『学院』にも東洋魔術のも

んは皆無。だから来ない、のループだ」

アレンも同じように周りを見ながら言う。

秘密主義とかは分からないけど、確かに昔は今みたいな交流なんてあんまりなかっただろうし、西洋は西洋で、東洋は東洋で交流してただろうし。

シルクロードってのも一応あったけどね。詳しくは知らないけど。せいぜいインドと中国でしょ。

だからまあ『学院』に東洋のが何も無いのは頷ける。当たり前だ。

……だからこそ疑問が一個生まれる。

「……なんで俺、ここに来たんだろ？」

アレンとの推察じゃ、仮に魔術をするとしたら俺は陰陽道だ。

ここは『学院』、西洋魔術が主体ってか全部の場所。

世界唯一の機関らしいけど、それはもう歴史上仕方ない。東洋人はほぼ来ない設定だ。

まさかそんな場所だとは知らずに俺を送り込んだのなら、凡ミスにも程がある。

知ってて送り込んだのなら、それはエグすぎる。

お札が入ってたって事はお札を使う魔術の筈だ。

でもアレンの話では西洋魔術にお札を使うものは基本的に無い。

という事はやっぱり俺は陰陽道で、西洋魔術をやれって事ではない。

……結局俺をどうさせたいの、じいちゃんは？

「ケルトの俺には分からねえけど、きつと意図はあると思うぜ？」

「……逃げるのは無理かな？」

「無理無理、門を通ったんだからな」

肩を落とす俺をアレンは励ましてくれるけど、ちょうど180°、日常とは真反対の世界に送り込まれたんだ。しかも意図不明。

自分で言うのもアレだけど、よくこんな風にアレンと普通に喋れるよ俺。ぶっ倒れてもおかしくないと思うんだ。

試しに逃げられるかどうか訊いてみたけど呆れた顔されて無理と言われた。

まあ無理だろうね、なんとなくそんな気がしたよ。

そんな甘くない。

仮に逃げれたとして、後々何が起こるかも分からないし。

なんたつて魔術、呪いとか掛けられそうだ。

「ってというか、このご時世に魔術をやる意味はあるの?」

今から魔術を教わる、っていうか既に基礎基本とかその他諸々バツチりらしい既に魔術師なアレンに向かって言うのはどうかと思うけど、それでも疑問だ。

そもそも『魔術』とか言ってるけど、実際はゲームとかで見る『魔術』と同じような感じなのか?

杖とか振るのか?

ビビデ・バビデ・ブーなのか?

謎過ぎる。

一応現代には科学っていうものがあるからね。

剣振り回して馬で駆け回ってた時代ではないよ。

そんな俺のある意味今ここにいる人達をバツサリ切り捨てる様な言葉を聞いてアレンは苦笑い。

怒らなかつたのでホツとした。

「……まあ確かに、普通に生活するなら要らねえな。魔術は万能じゃねえし」

あつさりアレンも認めたまよ。

凄いいつさりだ。特に拘こたわりが無いのかな、って思うくらい。万能じゃないともあつさり言っし。

まあ万能だったら今頃は科学文明じゃなくて魔術文明になってるだろうから、そこはあつさり言えるかもしれないけど。

それでも、とアレンは言っつてさつき地面に丸とか書いてた木の棒をもう一回取り出した。

アレンが何かを呟くと、それがメキメキと軋む様な音を立てながら伸び、先が別れて葉っぱが数枚生えた。

……魔術だ。

「この世には魔術でしか出来ない事もある。科学では絶対に解決出来ない、魔術でしか解決出来ない現象や事件もある。それをどうこうするのが魔術師だ」

木の棒からすっかりミニチュアサイズの木になったものを軽く振りながら、アレンはニヤリと笑う。

スツゴさまい様になつてる。

科学ではどうにもならない事。

確かに今アレンが見せたものは絶対に科学じゃ無理だ。

何がどうなつてこうたのか、目の前で見てた俺は見当がつかないし。いきなり棒が成長したとしか言えない。

これは無理でしょ科学では。

「じゃあさ」

「続きはまた後だ。今日のメインイベントが始まるぜ」

「？」

脳内から沸き上がる質問。

それをアレンに言う前に、シッと遮られた。

メインイベントが始まるかららしい。

よく意味が分かんないけど、取り敢えずアレンが向いてる方向を見
てみる。

……いつの間にか人が空中に立って何事かを言っている。

あんまり聞こえないけど、何か始めるから着いてこいとかなそんな感
じの言葉。

「……うっ、浮いてる、人が……」

「こづいづの見慣れてる俺からしたら、なんか新鮮な反応だな」

あんなの見たら普通は驚くに決まってる。

浮いてるどころか歩いてるし、空中を。

隣のアレンは俺の反応が新鮮らしくて笑ってるけど、普通は見慣れ
てないからね。

アレンが異常なだけだと思う。いや間違いない。

浮いてる人が空中を歩き始める。

どうやら丘を下って森の中へ入るらしい。

着いてこいとかな言ってたから、周りの人も歩き出す。

目の前のお城はスルー！

……結局このお城はなんなんだろう。

集合場所に使っただけとか？ 渋谷のハチ公か。

「どこ行くの？ ってか何が始まるの？」

どこかに向かっているのは間違いない。

こことは別の場所でアレンが言うメインイベントをするんだと思う
けど、その肝心のイベントが何か分からない。

魔術の披露とかだったら俺は無理だ。

……本音を言えば帰りたいんだけど。

「どこ行くかは知らねえけど、やる事は分かるぜ。『イニシエーション入学儀礼』だ」

浮いてる人の後を追って、流れる人混みの中でアレンは笑う。
楽しいから笑うんじゃない、ニヤリと不敵な感じに。

……嫌な予感しかない。

NO.2: Encounter (後書き)

ここから何故か一気に長くなって。
神威です。

長くなってるのに別作品の影響で私自身はあんまり長くなった感じはしないのですが、読む方にとってはいきなりの増量ですよ。

リメイク版だしガッツリ書いたらろうと思ひ、タラタラと説明させてみたのですが、眠い。

ホントは人が揃う筈だったんですがね。

なんでこんなに字数が増えたのか？

あ、『学院』に対する大人の思惑は特に書きませんから、なんか身構えないでください。ね。
名刺とか渡しませんよ。

という事で、これからは字数はこれくらいを目安にして書いていきたいと思うのでよろしくお願いいたします。

NO.3 : Cute boy

空中を歩いていた人に連れられて、現在再び森の中。狭い道に結構な人数がいるから上から見たら人の川みたいになってるだろうね。

宙を歩いてた人が先導してるんだけども人数が人数だし、しかも俺とアレンがその中で結構後ろの方にいるからもうその宙を歩いてる人は見えない。

ただひたすら人の流れに乗ってるだけ。

誰も何も話していないから響くのは足音だけでなんか軍隊の行進みたいだ。

アレンを除いて周りの人は皆表情が固いから余計に軍隊っぽく見える。

そんなに緊張する様な事が始まるのかな？

……一体全体何がこれから行われるのか謎でしかない。

「ねえ……『いにしえーしょん』って何？」

謎で謎で仕方がないから隣のアレンに訊いてみる。

自分的にはずっと気になっていた単語の意味を訊くっていう行動だから別段何も変な気はしない。

けども、やっぱりこの場でその質問はおかしらしい。

『いにしえーしょん』と俺が言った途端に周りの人が一斉にこっちを向いたから。

きつとほぼ全ての人が日本語なんて分かんないと思うんだけどなあ

……

俺の『いにしえーしょん』っていう微妙な発音にも過敏に反応してくれたっぽいね。

そんなにピリピリしなきゃいけない事なのかな？ だったら帰りたい

いけど。

「ああー……そりゃユウキは分かんねえよな」

「……スッゴいこつち見られてるんだけど」

俺の事情を分かっているアレンはのんびりとしているけど、周りの人はなんか視線の強さが半端無い。

もう俺を『見てる』って表現よりも『睨んでる』って表現の方が正しいね。

「日本語で何言ってるんだお前ら!?」って目がそう言ってる。

周りの視線にビクビクしてる俺とは違ってアレンはのんびりと顎に手を当てて、うーんと頭を捻りながら多分俺にどう『いにしえーしょん』を説明するか考えている。

周りのは全然気にならないらしい。羨ましいねその胆力は。

「『学院』がどんなのするかは知らねえけど、目的は間違いなくニユーガクシャセンコー《入学者選考》だと思っぜ」

「……どういう事？」

「要はニユーシ《入試》だな」

サラッとアレンはとんでもない事を言ってくれた。

『入試』。

そついえば『学院』は名前の通り学校だったね。なら試験はあつてもおかしくない。むしろなんで今まで気付かなかつたって思っくらい普通だ。

手紙が来たから入学決定なんてそんな甘いもんでもないだろうしね。だから周りの人は皆固い顔になってるんだ。納得だよ。

入試の日に緊張しない奴なんてほほいしない。なんか良い感じにリラックスしてるアレンは変なだけだ。

でも、俺はそんな『試験に』緊張するとかそんなレベルじゃない。

なんせは俺は知識ゼロ、経験ゼロだ。
試験なんて受けれる様なもんじゃない。何も知らないんだからね。
そもそも何も知らない俺をこんなところに送り込んだ方が悪い。そう、
あの変人が！

「……テストとかムリ、絶対ムリ！ 知識ゼロでペーパーテストと
か常識的にムリだって！」

「実技かもよ？」

「なおさらムリ！」

今さら騒いだって仕方ないかもしれない。
でもこうでもしないとやってられないよ。

高校卒業してないのにセンター試験、いや東大の二次を受けるのと
同じだ。無謀過ぎる。

アレンは実技かもとかフォローにもなってないフォローを入れて
くれるけど、実技ならもつとダメだよな。

魔術とか使った事無いよ。

野球やった事の無い奴がピッチャーしたりするくらい無謀だ。

「まあ落ち着けて！ ユウキは絶対オンミョードーが使える。大
丈夫、なんとかなるって！」

「ムリだね！ いきなり覚醒とかそんなマンガみたいな事も無いし、
陰陽道を使った記憶も無い！」

「昔思いつきり頭打ったせいで忘れてるだけだ！」

「そんなワケあるかーっ！」

アレンは楽観的過ぎる。

なんとかなる程人生甘く無いね！

そもそもお札を見たってなんもピンと来ないし。

魔術って頭打って忘れる程インパクトがちっちゃいものでも無いで

しょう!?

宙を歩いていた人に受けないって言うてやる。体調不良だのなんだの言えば受験は回避出来るだろうしね。こっちこそ“なんとかなる”だよ。

「……つてもここまで来たら受験は絶対だぜ? 一旦門を潜つたら受験直前に死なない限り受けなきゃいけないって噂だしな。まあ学院に入りた奴ってかなりいるから、それくらいしなきゃ面目が立たねえって事だと思っけどな」

「……」

アレンは笑いながらそう言うけど、俺にとっては笑えない。心を読んでるのかと言いたいくらいのタイミングだよ。

せつかくの計画が音を立てて豪快に崩れ去った感じ。てか崩れたね。

『世界唯一』の魔術師の為の学校。

そりゃ入学希望者は多いだろう。だからこそ一旦受験しに来たら『逃げ』は不可能ってのも気持ちは分かる。残念だけだね。

という事はやっぱり受験以外の選択肢は無いらしい。

移動中の人の川の中にいるんだから引き返して逃げるってのも難しそうだし。

そもそも門の外には出れないらしいし。

「……諦めるしかないって事が、結局」

ため息しか出ない。

まあ恥掻いても周りには外人ばかりだから日本にまで変な噂とかが立たないのが救いかな。

『魔術師』なんて人達は完全に裏社会っていうのか裏文明っていうのか分からないけど、ともかくアウトサイドの人達だから今後一生会わないっぽいしね。イメージだけ。

ため息をついて諦めた感全開の俺を見て、アレンはニンマリと笑う。なんか恨めしい。

そしてそのニンマリ顔のまま右手を俺の肩に回してガツチリと肩を組んだ状態にした。

「そう悲観する事ねえって。本気でヤバかったら俺も一緒になつて事情説明してやるよ。……フワケで、よろしくな、相棒！」

「……また調子良い事言つて。一応これでも受験のライバルだよ？
一人でも人数減らした方が有利なのになんで引き止めるかなあ」

笑顔でありがたい事を言ってくれるけど、アレンは俺の事を考えていて大丈夫なのかな？

入試って事は多かれ少なかれ不合格で落ちる人がいるって事だ。

それに今までの話から推測するに、受験者は誰一人としてこれから行われる入試がどんな形式なのか知らない。ペーパーか実技か、はたまた両方か、それとももっと別の何かか。

名が通つてる（本人談）というアレンだって油断は出来ない筈なんだけど……

いくら素人の俺でも入試を受ける時点で合格する確率は小さいけど確かに存在する。ゼロパーセントは「受けない」の選択肢だけだ。だからわざわざ引き止める意味が無い。

ゴミみたいに小さくても、障害は取るべきだ。

「なんでって、そりゃここでできた新しい『男友達』だけ？ 一緒に合格して一緒に楽しみてーじゃん。あと俺の心配は不要だ。入学^{イニシエ}儀礼^{イシヨウ}でミスる様な生ぬりい努力積み重ねてきたワケじゃねえし」

ニカツと笑いながら回した腕で俺の肩をバンバン叩く。

よくもまあそんなクサイ台詞が言えたもんだね。

ストレート過ぎてちよっと照れるよ。

そんなクサイ台詞を堂々と言うアレンだけど、最後の方の言葉はちよつと違った。
今さっきの笑顔とは違う感じの鋭さを孕んだ、不敵な笑みを浮かべて言う。

それは根拠の無いチープな強がりではなく、今まで自分が積み重ねてきた努力に対する誇り。

絶対的な自信。

瞬時に悟った。

ああ、確かにアレンにとってはこの程度のものなんて簡単なんだろうな、って。

一応ずつと柔道やってきたし、これでも全国にだって出場はした。

二回戦で一本取られて敗退だけどね。

でも、だから分かる。

スポーツにせよ魔術にせよ、物凄い努力を重ねた人はやっぱり何か『持つてる』。

そんでもって自分が『出来る事』と『出来ない事』を直ぐに判断出来る。

おそらくアレンはその何かでもって入学儀礼は余裕と判断したんだろう。

なんかカツコイイね。

「まあ俺は合格なんて出来ないから、その『男友達』は一瞬で消え……、あれ？ 『男友達』？」

「オイオイ悲しい事言うなよ。って、どうした？」

自分で喋っていて何か違和感がある。

自分の合格率がゴミより小さいってところでは勿論ない。

『男友達』だ。

わざわざ『男』を付けなくてもいいよね普通。

ここで初めてできた『友達』で普通は十分だよ。

でも敢えて『男』を付けるって事は、やっぱりその逆もあるって事だよ。

日本語に慣れてないから友達の性別をくっ付けて言ってるってオチではない気がする。

だって英語で言う時は『friend』で、性別なんて付けないもん。付けたら高確率で別の意味になるよ。

「ねえ、『男』友達って事は『女』友達はもう既にいるって意味？」
「……？ おう、別に新しい友達ってワケではないけど幼馴染がいるな」

俺の質問にアレンは一瞬キョトンとしたけど、直ぐに笑いながら答えてくれる。

「……やっぱりね、予想通りだ。

いや、でも幼馴染だとは思わなかった。
なんて漫画っぽい関係だ。

「可愛い？」

取り敢えずこの質問は外せない。

答えによつてはこれからのアレンとの関係を考えないといけないね。いやまあこの『インシエーション』が終わったら俺は日本に帰るだろうから関係自体は短いけど、それでもだよ。
大切だ。

俺の質問に答えるのは照れ臭いのか、アレンは肩を組んでいない左手の人差し指で頬を掻きながらちよつと間を置く。
だからと言って俺は質問を撤回しないけどね。

「……いや、『可愛い』って言うよりは『綺麗』だな。勿論幼馴染の鼻屑目無しで」

全然違う方を向いて俺の方を見てないあたり、やっぱり照れ臭いらしい。本人はいないけど。

……しかし、まさかと言うかやっぱりと言うか、何とも言えない答えが返ってきたね。

可愛い、じゃない、綺麗で美人な幼馴染なんて余程の幸運の星の下に生まれなきゃ側にいないと思うんだけど、アレンにはいるらしい。まあ鼻負目無しとか言ってるけど、実際どうかは分からない。アレンの好みが人類共通でもないしね。

……照れながらもそう言える幼馴染がいるのは羨ましいけど。いや、殴りたいかもしれない。

今ならまだそっぽ向いてるし、肩組んでるからゼロ距離。殴るなら今だ。……とか一瞬思ったりもしたけど、さすがに殴りはしない。殴ったら色々な意味で俺の負けだよ。

「……やっぱり帰りたい。アレンはその綺麗な幼馴染とイチヤイチャしてたらいいじゃんか」

「そんな事出来たらもうとっくの昔にやってるっつもの。そういう奴じゃねえんだよ」

なんかもう色々悲しくなってきた。

せつかくできた友達は最強のリア充だったし。

可愛い彼女より稀少かもしれないよ、綺麗な幼馴染って。

今日もう何度目か分からないぐらいのため息が勝手に口から溢れるよ。

我ながら悲壮感たっぷりの声でアレンに妬みを言ってみる。

が、アレンはアレンで苦労しているらしい。

ため息混じりにイチヤイチャ出来たらイチヤイチャしてるって。

焦らされてんのかな？

「ツンデレ？」

「……なんだ『ツンデレ』って？」

なんとなくこういう関係にありがちなパターンを訊いてみるけど、通じなかった。

そういえばアレンは外人だったね。だったら知らないか、この言葉。まだまだ最近の言葉だし。

『スシ』とか『サムライ』とかと同じ様に外国に定着してたら引くよ。

聞かない言葉に首を傾げるアレン。

説明するのも面倒なので適当にはぐらかして話を変えようか。

「ところでいつまで歩くのかな？」

「さあな。あ、でもなんか見えてきたぜ」

「……前の人の背中しか見えないんだけど」

いったいいつまで歩くのか、なんだかんだでもう結構歩いている。

いい加減目的地かどっかに着かないのか。

話題を変える為にもアレンに言ってみれば、アレンはちょっと爪立ちになって上を見ながらそんな事を言う。

生憎俺には前で歩いてる人の背中と頭しか見えないんだけど。前の
人結構でかいし。

それでも悲しいかな、これが西洋人と東洋人の差か、俺とアレンじや頭一つ背丈が違う。

……いや、小柄と言われる東洋人の中でも残念な事に更に小柄な俺と、スラッとしたアレンとの差は頭一つで済んでいないか。

今まではあんまり背丈は気にしない様にと心掛けてきたけど、アレンを含めた外人だらけのこの場所じゃ流石にコンプレックスになりそう。

悔しいからアレンの肩組みを解いてピョコピョコ跳ねてみる。

確かに前の人の肩の上からほんの一瞬だけ何か建物らしき物が見えた。

隣のアレンから何とも言えない視線を感じるけど、この際無視だ。

「確かに何かあるね。よく分からないけど、なんかボロそう」

「……あー、ありや城だな。相当古そうだな、壁とかボロボロだぜ」

跳ねてやっと一瞬だけ見えた建物。

ほんの一瞬だから詳しくはよく分からないけど、見えた感じ灰色がかってボロそうな印象だ。

アレンは哀れみを含ませた俺への視線を外して、もう一回その建物を見ながら教えてくれる。

さっきより建物に近付いたからか、アレンはもう背伸びもしていない。

前の人混みの隙間から覗いてる。

それなら俺も見えそうだと思ったからやってみただけど、残念ながら視界の上の方にちょっと何かが見えるだけ。アレンは前の人達の頭とか肩の間から見てたってワケだ。目線の低い俺じゃムリだった。

「んー、さっきの城とは形がちよっと違うな。ちっさいし」

「！ って……あ、お城がか」

アレンが『ちっさい』とか言うからピクツて反応してしまった。

それでもって反応してしまった自分にもイラつく。俺はちっさいはない、周りの外人が高いだけだ。

アレンはまだジツと俺には見えないお城を見るから、俺の今の反応には気付いてない。

よかったと思いたいけど……もういつそ拾って欲しかったね。そっちの方が笑い話でいいよ。一人ってねえ。

一人でピクツてして一人で片付けたら何か悲しいよ。

スベツたみたいだ。

「おっ、前の人達が止まり始めた」

「じゃあそのちっさいお城が目的地だったってことだね。やっとだよ」

アレンの声が少し弾む。

やっぱりアレンも歩くのは飽きていたらしい。

前の人達が止まるって事は先導していた空中を歩いてた人が止めたって事だもんね。

『イニシェーション』なるものが始まる場所がそのボロい城らしい。アレン曰く入試なんだけど、場所から察したらペーパーではなさそうだな。

俺にとつてこれは好都合なのは分かんないけど。

ただの体力テストならなんとかなるかな……。つて、なんで受かるうとしてんの俺！？ 受からなくていいんだよ俺！

ハツとしてビシビシと両の頬を叩く。目を覚ませ俺と。

隣のアレンは気合い入ってるなと感心してる。

そんな意味じゃないけど。むしろ逆。

そんなアレンの気持ちに水を差す事言わないけど。

なんか申し訳ないし。

「……ちっさいとか言ってたけどさ、でかいじゃん」

「いや、高さがねえからそう思ったんだけどさ。広がったな」

ダラダラとアレンとダベりながら歩を進めると直ぐに俺でも見える様になった。見えたとたんに着いて事て周りの人全員が止まったから、そりゃ見えるよねって話なんだけど。

城の外観は灰色の石造り。城壁も何もかもがボロボロというのを差し引いても写真とかで見たり千葉の浦安とかにある所謂『西洋の

お城』って感じの見た目ではない。

さつき見た見た巨大な城よりも高さは低いし、尖塔が連なってもいない。見張りの為っぽい塔が城壁の左右に一棟ずつあるだけで、後はもうそんなに高く階層があるわけではなさそう。五階建てくらいはあるけど。

外観で言えば城っていうよりも宮殿に近いね。

おまけに城壁には蔦だのなんだのが這い回り、ヒビだって見える。

昔はどうだったか知らないけど、今は震度2くらいで全壊しそうな気がする。

てか最大の疑問は、なんで森の中にこんな城があるのかって事だね。

「……何するのか知らないけどさ、こんな人数で何かしたらあの城潰れない？」

「城の中でやるとは誰も言っただけ？」

見た感じ高さはともかく広さは凄くありそうなこの城。城を囲ってる城壁がずっと続いてるからね。

今この場に100人以上はいるけど余裕で入るだろう。まあお城だし、昔は100人以上の人が実際に生活してたんだろうから当たり前だけど。

ただ、何せボロい。

仮に100人が一斉に稲葉ジャンプを試みたら数十秒で音を立て崩壊しそうな気がする。

アレンは城でやるのは誰も言っていないって言うけど、わざわざここまで歩いてきて城を使わないワケが無い。それに、たとえ使うのがほんの一瞬でも心許ない外観だし。

地震の無いイギリスって国の建造物はとにかく揺れに弱い。石造りの時点でもうダメでしょ。荒っぽく言えば積み木と似たような造りって事だからね。

「だいたい、こんな場所でするんだからペーパーの筈無いじゃん？
て事は実技だよ？ 魔術がどんなものかは知らないけど、あんな
ポロポロの城壁くらいは崩せ ムグツ！？」
「シツ！ 何か話し始めるぜ」

ヒビが入って隙間だらけの壁を見ながら訴えてると無理矢理アレ
ンに手で口を塞がれた。
結構マジな目で。

当たり前だけど初めて見るアレンのマジな目にちょっとビビりなが
らも、アレンの視線の先を見る。

先導役だった人が周りを見下ろしながら、さっきの城で見た時よ
りも立っている場所の高度を上げようと何も無い空中で階段を上る
様な動作を繰り返していた。

なんかパントマイムみたいだけど、実際に高度は上がっている。何
も無い空間を本当に『踏んで』いるらしい。

「ふむ、やはり高度を上げると全員の顔がよく見えるな。……よし、
それじゃあ今から入学儀礼イニシエーションの説明するからよく聞けよ！」

見下ろしながら満足そうに頷き、先導役の人が大声で喋り始めた。
人が結構な数いるから全員の耳に声を届かせるのにはかなりの声量
がある。だからか、なんか最後の方は怒鳴ってるみたいな口調にな
ってる。

そしてその怒鳴り口調のせいなのかは分からないが、周りの空気に
今まで以上の緊張が張りつめた。

見える限りではアレン以外の全員が口を真一文字にして一言一句聞
き逃さないようにと真剣な眼差しで上の人を見てる。

唯一の例外たるアレンは和やかな表情だ。余裕たっぷりって言うの
かな？

「な、なんか凄い緊張感だね」

「!?!? ちよつ、いきなり話し掛けるなって、ビックリするだろ!」
「……なんだ、その表情ってハツタリだったんだ」

唯一の門外漢たる俺にはこの緊張感がよく分からない。なんせ別段ここに来たかったワケではなかったからね。

だからこの周りの緊張感に着いていけなくて居心地が悪い。周りの人は俺の事どんな風に見てるのか気になる。……いや、どうせ誰も見てないだろうけど。

居心地が悪いし、着いていけない身で何となく寂しいから周りで唯一余裕そうな顔のアレンの肩を軽く叩いて話し掛けてみる。

が、ビックリする程裏返ってすっ頓狂な声が返ってきてなんか申し訳なくなつた。

どうやら余裕そうな表情はハツタリだったらしい。

もの見事に張つてたブラフが破れたアレンは何ともバツが悪そうな顔をした後、口を突き出して拗ねた感じで文句を言ってくる。まあ当たり前かな、ごめんなさい。

「やっぱりアレンも緊張するんだね」

「……当たり前だろ、物事に『絶対』なんてねえだろ? 俺の自信は過剰じゃねえんだよ」

予想外だったアレンの反応に苦笑いしか出ない。

ごめんと謝つても文句を止めないのは仕方ないか。

ただやっぱりずっと言われるのは精神的に楽しくはないから、俺はアレンの反応を見てやっぱりアレンは合格すると思うとかプラスな事を言つて止めようとしてみる。

実際そう思ったし。

するとアレンは文句をピタリと止めた。

そして不思議そうな顔をしてそう思った理由を訊いてくる。

アレンが自分で言った様に物事に絶対は無い。中学生のサッカーチームにバルサが負ける可能性は0%ではない。可能性は限りなくちっさくても一応はある。

同様に、アレンがいくら優秀な魔術師であっても今回の入学儀礼に合格する可能性は100%ではない。

『サッカーの試合』みたいに明確なルールを事前から知ってる様なものでもないし、アレンが半端じゃないくらい苦手なものが『偶々』出てくるかもしれない。

この入学儀礼を受けると決めた時点で、そう決めた人達には例外無く受かる可能性も受からない可能性もある。

という事で意味も無く自信満々だと足元を掬われる可能性が高くなり、そういう人に限ってなんかバカらしいケアレスミスで死ぬ。

だからある程度緊張してるのは良い事だし、慢心とかも無いからアレンは大丈夫だよって感じの事を軽く、外人のアレンの為に優しい日本語で言う。

慢心さえなければ大丈夫。

なんたって「生温い努力はしてない」らしいからね。

そこの自信は良い事だ。

「……」

「なに？」

「いや、魔術の覚えがねえのに戦闘経験がスゲーある奴みたいな事言うなって」

「まあ柔道してたし勝負事には慣れてるよ」

スッゴい訝しげな表情で見つめられたからどうかしたのか訊いてみる。

どうやらアレンは俺の口からこういう勝負事に関する事が出るとは思っていなかったらしい。

……俺、華奢だしね。自分で言うのは悲しいけど、気持ちは分から

ない事はない。ただ、俺は体の線は細いけど実は中に筋肉が詰まってるという事実だけは伝えたい。

柔道やってたからと言って右腕に力こぶを作ってアレンに触らせる。アレンにとってはやっぱり意外だったらしい。

マジか、と驚いてペタペタ腕を触ってくる。

お望みとあらば腹筋だろうが背筋だろうが触らしてあげるよ。

柔道舐めたらダメだからね？ 全身使うから嫌でも体全体に筋力付けないとダメなんだ。

「……いやあ、まさかユウキがジュードー《柔道》してたとはな！
だったらそんな事言うのも分かるぜ。ジュードーあしの試合は「対一
だもんな」

疑問が解けて満足そうにアレンが笑う。

そつえばまだ俺が柔道してたって言っていなかったからね。

柔道は「対一」の競技。

野球やサッカーみたいに仲間がグラウンドやピッチの上に複数人に立っていない。

だからこそ自分の実力が絶対的にものを言う。

油断、慢心、それがチームスポーツよりも多く生まれやすいし、同時にその怖さを何度も経験してしまう。

畳の上では仲間の支えが声援以外無いからだ。

勿論俺だって経験したし、だからこそアレンの状態を見て大丈夫だろうなって思ったワケだ。

アレンは今まで魔術以外何をしてたのか分からないけど、それでも俺の言いたい事や柔道をしてたからこそ知っているものを理解してくれたい。

気が楽になっただけで笑ってる。

……ちよつと楽になり過ぎかもしれないけど。

「……って事で、今回君達の入学儀礼はこの目の前にある古びた城で行う」

唐突に先導役だった人の声が入る。

……そういえばなんか今は入学儀礼の説明中だった。

完全に話を無視してたけど、ヤバイよね。

なんか大事な話を聞き逃してたら洒落にならない。聞いたところでおそらく何も無い俺はともかくアレンは。

「ヤバツ、何も聞いてなかった……」

「最初は屋外でやるつもりだったんだけど、天気よほー《予報》で天候がよろしく無いからこの城の中でやる事に一昨日決まったんだと。今までの話は長い間歩かせたから申し訳ないって謝罪だな」

「……俺と喋りながら聞けてたんだ」

「そりゃ、このくらいは出来なきゃいけねーからな。ユウキも練習しとけよ」

話の聞き漏らしはヤバいと焦ったけど、アレンがサラツと今まであの人が言ってた事を纏めて言って落ち着く。

天候で場所が左右されるとか、なんか小学校の遠足みたいなノリだ。ノリが軽いよ。

それはともかく、アレンのその聞き分けの良さに脱帽だ。

さも出来て当たり前みたいな顔してるけど、かなり凄いと思う。俺と結構ガツツリ話してたと思うんだけどなあ。

聖徳太子みたいだ。

……いや、だからといって練習はしないけど。

別に出来なくても怒られはしないし。むしろ大概の人は出来ないよ。

「今回の入学儀礼のルールよりも先ずは君達、適当に四人組になって固まれ。別に近くの奴じゃなくていい。パツと周り見て気に入っ

た奴だ。ああそうだ、君達は全員で368人だから余りは出ないから安心してくれ」

上空からそんな言葉が落ちこちてくると、すかさずアレンは俺の肩に手を回した。

先ず一人って事だろう。

その行動があまりにも自然過ぎてどこのキャラ男だとツツコミたい。甚だやる気が出ないね。

いや、完全素人という俺の事情を知ってるアレンがいてくれるのは嬉しいけど、アレンは実力者だ。実際はどの程度凄いのか知らないけど、何となく雰囲気から察するに、本当に実力者っぽい。

だったら仮に今から作る四人組がチームだった場合、何かの偶然で俺が『合格』というイレギュラーな事態が発生しかねない。

流石にそれは『学院』としてはダメだろ。完全なド素人だよ俺。

ただ、逆に四人でバトルとかだったら是非ともアレンに俺の処理を頼みたいね。

周りの様子を伺ってみる。

やっぱり周りの人達も今から組む四人はチームになるのか敵になるのか戸惑って、あんまり人集めは進んでいない。

せいぜい俺とアレンと同じように二人組ってとこだね。

「……さて、と。残り二人のうち一人はもうそろそろ来るだろうし、どーせそいつがもう一人連れてくるだろうから俺らは決定だな」

「ねえ、それってアレン幼馴染さん？」

余裕そうにアレンがニヤリとする。

人が来るアテがあるとすれば、やっぱり噂のアレンの美人な幼馴染さん。

当たり前の様に来るって言うてるんだから間違いないだろう。

訊いてみたら案の定アレンはそうだと頷いた。

どんな人が気になるけど、それよりも訊いとかないといけない事がある。

「その人ってさ、強い？」

仮にこの四人組が敵になるなら事情を知ってるアレンはともかく、その他の強い人はお断りだ。命がヤバいからね。事情を知らないんだからきつと容赦無く攻めてくるよ。それは願ひ下げだ。

「強いな。味方にいれば最高に頼りになる。敵には死んでも回したくないな。厄介だからな」

シレッととんでもない事をアレンは言ってくれる。

実力者で幼馴染たるアレンが強いと認めてる時点でその幼馴染さんはかなりの人だと考えていい。

しかもその後だ。死んでも敵に回したくない。

どんな魔術師なのかは勿論知らないけどアレンがそう言うんだ、絶対ヤバイ。

てか敵になる可能性もあるのになんでその厄介な幼馴染さん待ってるの？

仲良く二人で受かれる様に仕組めばいいのに。

「……ねえ、四人で潰し合う可能性だつてあるのに『厄介』な幼馴染さんと組むの？」

「は？ どれ考えてもこの四人はチームだろ。敵になるなら強敵あいつなんて呼ばねえよ。リスキーなのは嫌いだし」

アレンはアツサリと俺が思っていたのと同じ考えを言っ
て、四人で潰し合う説を否定した。

曰く、目の前の古城からどうも怪しい気配するらしく、そんな場所
で合格を懸けて闘ったらヤバい奴はヤバいらしい。要は死ぬかもつ
て事。

なんか抽象的でよく分かんないが、たぶん実力者だけが持つてる『
気配が読める』アレだろう。マンガとかよく見るやつね。

実際に柔道とかやっていると相手の気配が少し読める様になっ
たし、その魔術師版だろう。

という事は今俺達の周りで迷ってる人は全員アレンより弱いつ
てとこだろうね。

そついえば上にいる人は『気に入った奴と組め』って言っ
てた。要するに組む相手は自由って事だ。

……もしかしてこれ、この作業だけである程度受験者の実力が分
かる様に仕組んでるのかな。

力のある人はある人同士で素早く四人集まって、後の入学儀
礼もさつさとクリア。逆に中々四人集まって組めなかった人は微妙な人ば
っかりで終わりっていう。

……酷い。じゃあもう入学儀礼は始まつてる様なもんじゃん！

「……この入学儀礼って、エグいね」

「まー、フェアではねえよな」

『気付けない』人への同情か、アレンが苦々しく笑う。

でもさつきまで虚勢を張って隠してたとはいえ緊張してたア
レン。苦々しかった笑顔は自分にも向かつてるのか。

今はリラックスした顔してるけど、これもハツタリかな？

てか今までのアレンの話が正しいのかは本当は分からないから結
局どう転ぶかは分からないんだけど。

「緊張してる？」
「……多少な」

横から見れば涼しげな顔をしてるアレンだけど、近寄ってみると少しだけ冷や汗が顔に浮いてるし、ポケットに突っ込まれた両手は拳になってるっぽい。肩がちょっと張ってるし。

本人も緊張していると認めてはいるけど、強がりなのか表情は余裕だ。もうちょっと喋って気を楽にしてあげようか。一応今の俺達は一蓮托生だし。

「アレン以外にも気付いて動いてる人、いるかな？ あ、幼馴染さんは除いてね」

「……よく見てろよ、俺みたいに涼しげな顔して動き回ってる奴が何人かいるだろ？ そいつらは気付いてるぜ。……あ、目が合ったな」

せわ 忙しなく周りを動き回ってる周りの人達を見ながらアレンに話し掛けてみる。

多少緊張しているのと、母国語じゃない日本語のせいで返答に間があるけどしっかり答えてくれる。

その途中に誰かと目が合ったのか、右手を軽くあげた。

アレンの視線の先を見てみると俺達と同じような二人組がいた。ただ俺とアレンみたいな男二人ではなくて男女一人ずつで二人だ。なるほどアレンが言った様に二人とも涼しい顔をしてるね。

アレンが右手を上げて挨拶したからか、向こうも右手を上げて男子の方がこっちにやってくる。

「君らも二人組？ なら俺らと組まないかな？ あ、俺はリドル、よろしく！」

なんかスツゴい気さくな感じで話し掛けてきた。勿論英語でね。近くで顔を見てみるとアレン同様顔の掘りが深くていかにも西洋人って顔立ちだ。黒っぽい茶髪によく動くブラウンの眼は好奇心が強そう。ついでに中々精悍だからアレンと並ばれると俺は悲しくなってくる。

やっぱり俺より背高いし。

アレンに右手を差し出して握手を求め、誘うのと自己紹介が同時。ノリまでもがいかにも西洋人だ。

アレンは握手しながら自分の名前と、ついでに俺の名前も言って友好的な印象を与えてる。……内心はどうなんだろうね。

差し出されたから釣られるままに俺も握手したら、ママがいったいの硬い手だった。野球でもしてんのかな？

「あー、せつかくの誘いはありがたいけど、もう俺らは合流待ちだから。悪いな」

「……そっか、そりゃ悪かったよ。それじゃあな。グッドラック！」

アレンが爽やかな笑顔で断ると向こうのリドル、だったかな？

ともかく向こうも爽やかな笑顔で爽やかにそう言って、何故か俺にも爽やかに手を軽く振って待たせている人の方へ引き返す。

……何この爽やかなやり取り。イケメンってズルいよ。

その爽やかに去っていくリドルは途中で仲間の子に向かって「振られた！」と潔く言って歩きながら器用に肩を竦めた。

続けて「男女同数でバランスよかったんだけど残念だよ」とも。

……あれ？

「今『男女』って言ったよね！？ 『男女』って！？ 俺は『男』なんだけど！」

「東洋人は『可愛い』からな。男が化粧して許されるのは極東だけだぜ？ こっちがやったら大ブーイングだ。つか、向こうの子もだ

いぶ中性的だな、服見なきゃどっちか迷うぞ。多民族の混血だなあ
りゃ」

俺は『男』だと主張する。すぐ反応しちゃったから日本語が勝手に
に出ちゃって通じないけど。主張したい気持ち先走って英語が喉
から全く出ないけど。それでも言いたい、『男』だと。
向こうも悪気が無いのは分かる。分かるけどさ、やっぱり性別は譲
れないじゃん。

隣でアレンが染々と何か言ってるけど耳には入らない。
多民族がなんだって？

向こうの二人は勿論の事ながら俺の主張は届かず、いや通じず、
人混みの中に消えていく。
やりきれない思いが残る。

「……………」
「褒め言葉だと思っとけて。…………てか遅いな、あいつ」

ガツクリだよ。

褒め言葉として受け止めれるのはオネエ系の人だけで、そういう人
はやっぱり少数派。勿論俺も違う。
何も分かってないアレンを八つ当たりで睨んでみるけど気付かれず、
余計にガツクリ。

そのアレンは腕組みながら遅いなとぼやいている。

「今さらだけど、幼馴染さんとは別に集まる約束なんてしてないん
でしょ？ アレンが勝手に集まるって思ってるだけじゃ？」

「…………そっ、そんなワケねえ…………っ！」
「弱々しく言うね……………」

アレンが勝手に思って勝手に待ってる可能性は多々ある。

なんせ別に「一緒にいこう」なんて約束してないんだし。幼馴染さんは幼馴染さんで勝手に四人集めてもう終わってるかもしれないよね。

アレンもさっきまでは余裕ぶった顔してたけど、今の俺のでブレた。弱々しく大丈夫だと言ってるけど、自信は無いらしい。

さっきの人達を振った手前、アレンは今仲間探しに行ける心境でもない。

周りの人達が少しずつだけど四人集まってチームを完成させ始めた。それがアレンの不安を増大させる。

「……探すか、俺の幼な」

ポツポツと四人集まってきたのをアレンは見ても、遂に折れた。

でも『見知らぬ誰か』を探そうと言わないあたり、まだ幼馴染さんを待っている。

ただジツとしているよりかはマシだ。俺がいいよと言いかけたその時、何かエコーのかかった声が古城の前にいる俺達受験生の間に響き渡った。

『こらーっ、アレン！ 女の子待たせないでよねっ！ なに、もしかしてあんた待ってるの！？ ふざけないで、普通待つのは女の子の方よっ！』

完全な怒号。相当お怒りらしい。

どこからか聞こえる謎の怒号に周りの人達や上でこの様子を眺める先導役だった人はビククリして辺りをキョロキョロと見回している。その中でアレンはニンマリと笑って悪りいと誰かに呟いた。

……どうやら幼馴染同士考える事は同じだったらしい。

俺の手を掴んでアレンは走り出す。どうやらどこからあの怒号が

飛んできたのか分かってるらしい。

周りの人がいきなり動き出したアレンと俺を見た。

……恥ずかしいな。

「……パワフルな人だね」

「まっただ」

引かれっぱなしじゃいけないから、手を振りほどいてちゃんと走って横に並ぶ。

口から出る言葉は迷惑してるって感じのものだけど、口調と表情は嬉しそうだ。

……えー、なにこれ妬む。

人混みを掻き分けて進むアレンを横目で見失わない様に確認しながら着いていく。

走り出して一分経たずにアレンが減速し始めたから、もうすぐだと思ふ。

周りを見るに、古城の城壁近くだ。

っていつかなんで場所分かるんだろ？

「悪っりい、俺らも」

「遅いっ！ わざわざ連絡させないでよねっ！」

「待って……。お、おうゴメン」

ジョギングの様な速度になったところでアレンが叫ぶ……。ただけど途中で遮られた。

アレンの見る先にいるのは腕組んで城壁にもたれかかった赤みがかつた茶髪、所謂赤毛の女の子。ご機嫌斜めなご様子だ。

……あ、でも成程アレンの言う通り美人。

スラッとした細身で、女の子にしては長身。日本人の女の子では中々見れないタイプ。……もしかすると俺より高い。

髪は肩に届くくらいのショート。
キリツとした目力のある大きな瞳が特徴的で、気が強そうな印象。
つてか間違いないく気は強い。
ともかく顔のパーツは整つてて、モデルみたいに凛々しい感じ。確
かに可愛いよりは綺麗だね。

「……もう、アレンが来るまで一体何回誘いを断ったと思ってるの
！？ 面倒くさかったわ！」
「ああ……だからそのつ、悪かったつて」

もたれてた城壁から背中を上げて、アレンの方に歩み寄って早口
の英語で捲し立てる。

アレンはタジタジ。完全に尻に敷かれてる。
これは今までのアレンのイケメンなイメージが崩れ去って残念だ。
そして一つ言える事は、このアレンの幼馴染さんに何故誘いがいっ
ぱいきたか、その理由。どう考えてもルックスだろうね。
もう実力とかたぶん関係無い。取り敢えず見た目でアタックだろう。

「いいっ！？ あたしのパートナーは後にも先にもアレンだけ、分
かかってる！？」
「お、おうっ！」

アレンに寄って襟元を掴んでサラツと物凄い事を言ってるが、果
たして幼馴染さんがそれに気付いてるのか。
ほぼプロポーズなんだけど……そういう意味が含まれているのかは
不明だ。

一応アレンは気付いてるね。脅されてるみたいな形になってるのに
嬉しそうだし。

ただよく考えれば幼馴染さんは襟元掴んでるあたり、あの言葉
にそんな意味は無さそうだ。

口から普通に出た言葉とかそこら辺だろう。……仲良しだね。

「で、一人連れて来たワケ!?!」

「……ひ、左を見てくれ」

襟元掴んだままアレンに問い詰める。

なんかアレンがカツアゲされてるみたいだ。

襟元を締められ、更に強く問い詰められてアレンは苦しいのか、変な声を上げながら左側を指差す。

俺がいるからね。

そうすると幼馴染さんはチラッとこっちを見た。

なんか気まずいから軽く会釈を試みる。

しかし幼馴染さんは俺を本当に一瞬だけ見た後、またアレンを締め上げた。

ウゲェッとアレンの喉から呻き声が漏れる。

「な・ん・で、『女の子』なのよ!?! 四人組の男女比がおかしいでしょ!?!」

「いや……ユウ」

「ちよーっとなったっ! ほんと待ったっ! 俺は『男』なんだけど!?!」

「……って事だ」

聞き捨てならない言葉が飛び出たから遮らしてもらっ。やっぱり反射的に日本語が出たから通じてるかどうかは知らないけども! なんでさっきから俺の性別を間違えるかなっ!?!

よく見てみよう、男だから!

アレンの幼馴染さんは俺の乱入とアレンの精一杯の言葉でキョトンとし、もう一回俺を見た。

そしてアレンの襟元を放し、こっちに近付いてくる。

近づいてくると今度はズイツと顔を俺の顔の目の前まで寄せて、じっくりと俺の顔を眺めてる。

……あ、睫毛長いしなんか良い匂いする。じゃない、近いっ！ 近い近い近いっ！

顔じゃなくて服とかで判断して！ 顔が、顔が赤くなるのを抑えられない！

「……ホントだ。可愛いから女の子かと思ったけど、立派な男の子ね。……ごめんなさい」

じっくり俺の顔を眺めた後、スツと身を引いてアレンの方へ戻る。どこでどう判断したのか分かんないけど一応分かってもらえたらしい。

ついでに戻り際にごめんなさいという言葉と共に軽く、しかし強烈なウインクを叩き込まれた。

これは強烈。顔が煮えた、トマトの様に。

「日本人なのね、だったらこのルックスも納得よ。面白い子見つけてきたわねアレン」

「おお……俺の仕打ちへの謝罪は無しか」

日本人なら納得って、日本人が海外でどんな目で見られてるのが疑問でしかない。

幼馴染さんは襟元締めてたアレンに対して悪びれも無く俺を連れて来た事を評価してるけど、アレンはやっぱりちよつと不満らしい。ボソツと「謝罪は？」と呟く。

が、それが聞こえたららしい幼馴染さんがアレンの方を向くと黙る。

……哀れだよアレン。

「あ、そういえばまだ名前言ってないわ。……あー、あー、日本語

「ってこれでいーわよね？」
「！」

もう一度俺の方をクルリと向いて、幼馴染さんが今度は日本語を喋りだす。

やっぱりちよつと拙い部分はあるけれど、それでもかなり流暢だ。

……アレンもだけど、なんで喋れるの？

幼馴染さんは自分の日本語が問題無いかアレンに確認を取っている。

アレンがオツケーと人差し指と親指で丸を作ると、意気揚々と話さず。

「初めまして、あたしはミュウ・ヴィント。Family nameは『B』じゃなくて『V』だから気を付けてね。いちおう、アレンのオサナジミをやってるわ。ヨロシクね」

「あ……北藤悠輝です、よろしく」

欧米人ってシャイはダメな性格だと見なしてるって話は聞いた事あるけど、どうやら本当らしい。

アレンの幼馴染さん、改めミュウさんも気さくだ。

なんか『さん付け』しなくちゃいけない気がする人だから、日本語の時は『さん付け』で呼ぼう。

さっきの爽やかなイケメン（名前は忘れた）の人が右手を出して握手を求めてきたから、今回も握手だろうと思って右手を出す。

が、ミュウさんは俺の右手を無視して堂々とハグをしてきた。

確かにハグは欧米では普通の挨拶らしいけど……照れる。スッゴい照れる。

やっぱり良い匂いするし、体が当たるからミュウさんがスタイル良いと分かってしまった。あと背はギリギリ俺の方が高いって事も。

何故かアレンが驚きの声を上げた。

「お前、基本的にハグはしないんじゃないかなかったのか!? 男と!?!」
「ユーキが可愛いもの。あたしが可愛い物好きなの知ってるでしょ?」

「……『物』扱いですか、俺?」

「どうやらミュウさんがハグするのは珍しいらしい。
ただ、どうやら俺は『男』として見られてはいない。

『物』だって、俺。

素直に喜べない。ってかむしろ泣きたい。

気を落とす俺の目の前でアレンとミュウさんが何か揉めてる。

英語のスラングはよく分からないけど、俺の事を『男』として見てやれって主張するアレンと可愛いのがいけないと応戦するミュウさんって構図だ。

え、俺の責任?

「てかミュウ! 俺はユウキをゲットしてきたけどお前はどんなんだ!?!」

「よくぞ聞いたわね! 見なさい、私がゲットしてきた妖精を!」

アレンがミュウさんにお前は誰か見つけたのかと言いつつ。

いや……でもちよつと待て、『ゲット』ってなんだ?

俺はポケモンか?

てかミュウさんも『ゲット』とか言わないで! 人権は誰もが持つてる権利だから!

アレンに言われてミュウさんがさっきまでもたれ掛かってた城壁の方を向き、誰かの名前を呼んだ。

すると城壁の側にいた女の子が反応してトコトコとやってくる。

ミュウさんはその子を後ろからギュッと抱き締めながら俺とアレンに紹介した。

「セイラよ！ どう、可愛いでしょ？」

セイラと呼ばれた子がミュウさんの腕の中で小さく会釈した。俺もアレンもどう反応したらいいか分からない。

どうやらこの子は欧米では非難されて矯正くちくされてる稀少種のシャイガールらしい。

ただ、確かにミュウさんがピクシーと形容したくなる気持ちは分かる。

日本で言う森ガールの的な服装に、腰まで届く長い金髪は手入れが良いのかマジで陽光を反射して光ってる。

金髪の人は周り見たら沢山いるけど、このセイラって子のは一線を画してる。

長い睫毛にパツチリとした二重に大きな瞳。

前髪は作らずに二つに分けていて、顔は全体的に柔らかい印象。

背は小柄で線は細い。いや、なんかもう華奢過ぎて魔術師とか大丈夫なのか魔術を知らない俺が心配になってくる。

綺麗なミュウさんとはまた違う、可愛い子。

……何この四人組、ルックスのレベル高過ぎて鬱になるんだけど。

「……………」

「……………」

「……………」

セイラって子は会釈をして以降何も喋らない。

というか、たぶん話に着いていけてない。

俺とアレンもなんて話し掛けたらいいのかわからずに黙りっぱなし。さっきから頻繁にお互いにアイコンタクトでどうしたら良いか相談してるけど、何も思い浮かばない。

……仕方ない、なんか無理矢理話し掛けてみようかな。

「……」

そう思っつてセイラを見ると、目が合った。バツチり合った。喉まで上がった言葉が萎んで腹の中へ落ちていった。

そして目を外してもらえない。なんかもう、チワワみたいな目ですつと見られてる。

これは精神衛星上よろしくないね。緊張してなんか色々ヤバイ。何か、何か話さなければ！

「……日本人形みたいで可愛いですね」

「ハウツ！？」

何か話さなければ、そう思っつるといきなりセイラがアレンやミユウさんよりも流暢な日本語でそう言っつてきた。

なんでそんなに流暢な日本語が喋れるのかとかそういう疑問もあるつちやあるが、別の衝撃で体が崩れ落ちてしまっつてそれどころではない。

隣でアレンがあーあと肩を竦め、ミユウさんはやっぱりそう思っつわよねっ、と同調して笑っつ。

崩れ落ちたから顔は見えないけど、セイラは俺のリアクションにビツクリしてオロオロしてるっぽい。

そういえばセイラはさっきまで何故か城壁の側にいてアレンとミユウさんのやり取りを聞いてない。だから仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

「あの……私、何か気に障る様な事言いましたか？」

「そんな事無いわセイラ、ユーキが紛らわしいのが悪いの」

「……あー、セイラだったっけ？ ユーキは『男』だからな」

アレンの言葉にセイラが驚きの声を上げる。

……何故、何故アレン以外皆俺を女と判断するのか？

むしろなんでアレンはちゃんと分かったのか、俺が男だと。

ここに来て魔術師というシヨッキングな存在を知った事よりも、俺のアイデンティティーが崩壊しそうで怖い。

俺の頭の上で必死に謝るセイラ。悪気が無かったのは分かる。

……ただ、日本に早く帰りたいたいという思いが強まったのは仕方ないと思う。

NO.3: Cute boy(後書き)

日本人形には勿論男女両方あります。

故に本当はそう言われたからといって、女の子と思われてるワケではございません。

神威です。

思ったよりも文字数が増えた。ビックリです。

かなり予想外だったんですが……まあいいや。

極東の人と西洋の人の顔のつくりはそれはもう違いますから、基本的に若く見られます。

イメージしてください。

亀梨君とトム・クルーズ、どちらの方が女装似合いますか？

という風な感じですかね。

日本の独身女性が海外に行く時にダミーの指輪を填めるのもこれが原因。

若く見られてモテるんですよ。狙われちゃあ危ないでしょう？

「〜だからねっ！」って使つとツンデレみたいに見えますね。…

…何この魔法の言葉。

ツンデレにしようとは思ってないのでお願いします。

あと、ハグは基本なので外国に留学しても驚かないでください。キスも。

挨拶です。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1500x/>

精霊の瞳

2011年12月4日01時48分発行